

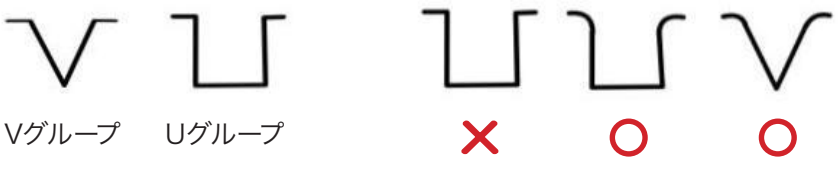


美しい晩秋のミシガンです。芝生一面に落ち葉が広がり、ボールを探しづらくなってきました。誰が決めたのかはナゾですが、あるはずのボールが枯葉のせいで見つからない時は、同伴プレーヤーの同意を得てペナルティなしで新しいボールをドロップできる、という「ミシガンルール」が言い伝えられています。

今月は、ウェッジの溝とボールとバックspinについてお話しします。

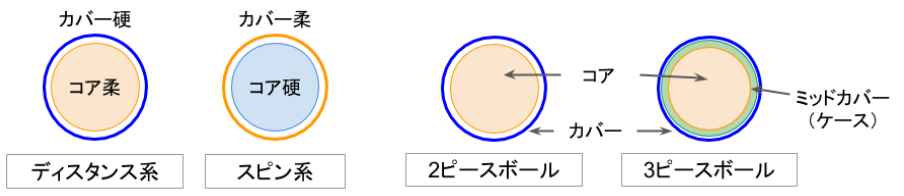
クラブフェースの溝を英語ではグループ(groove)と言いますが、長い間、断面がVの字をしているVグループが主流でした。1984年にPING社が新しくUグループを発表しました。Vグループよりも溝のフチが鋭角なUグループのPING EYE2は、ラフからでもピタリと止まると言われ、爆発的な人気となりました。

その後、2010年にルールが改定され、ロフトが25°以上(5番アイアンより下)のクラブで角溝が禁止になり、角に丸みを持たせたグループのみが許されることになりました。プロは2010年から、トップアマは2014年から、アマチュアには2024年から段階的にこのルールが採用されています。



これは余談ですが、PINGのUグループは本当に鋭くて、ボールがガリガリと削られ、白いカスに溝に残るほどでした。PINGのウェッジはスピンのかかりすぎでは？とツアー選手から懐疑的なコメントが出されるなど、ルール改定のだいぶ前から問題になっていて、最終的には適合クラブであるという裁定が下された経緯があります。一度適合であるとお沙汰の出たクラブを、新しく作られたルールで非適合にすることはできないため、新ルール改定以降はモデルによっては適合だったり非適合だったり、プロは使えなくてアマチュアは使えたりと、複雑な基準がありました。現代のウェッジはグループが丸みを帯びてもバックspinがかかるように、グループとグループの間にも、マイクログループという細かい溝が彫ってあるモデルが多く見られます。

ボールは、素材やディンプルの数・形状によってキャラクターが変わります。中堅価格帯に多い2ピースボールの場合、中にコア(芯)があって外にカバーがあります。ディスタンス系のボールはカバーに硬い素材を使ってスピン量を減らし、コアを柔らかくして反発力を上げて飛距離が出るようになっています。いっぽうスピン系のボールは、カバーに柔らかい素材を使っていて、グループにカバーが食い込んでスピンのかかりやすくなっています。



プレミアムボールの多くは3ピース以上の多層構造になっていて、各層は重さや硬さの違う素材で作られています。ウェッジで柔らかく打つ時はスピンがかかって、フルショットで飛ばす時は距離が出る、いいとこ取りのボールです。ProV1は3ピース、ProV1xは4ピース、TP5は5ピースです。

ショットにスピンをかけるには、良いボールと良いウェッジを使えばいい、とどこかで聞いたことがあります。あなたが間違えではなさそうです。さまざまなボールとウェッジを試して、お好きな打感や寄せやすい組み合わせをぜひ見つけてください。バックspinはあくまでもXファクター(不確定要素)です。毎回一定のスピンを意図的にかけることは難しいので、スピンをかけたい時にかけるというよりは、この条件下でのショットはスピンがかかりやすいな、かかりにくいな、と予想するための知識であると言えます。いいライからであれば、素直に転がるショットが一番有効です。もし上げるか転がすか迷ったら、最後は自分の得意なショットで攻めてください。